
あの日と同じ手のぬくもり【「俺を返してくれ」の外伝】

菜宮 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日と同じ手のぬくもり【「俺を返してくれ」の外伝】

【Nコード】

N5631G

【作者名】

菜宮 雪

【あらすじ】

「俺を返してくれ」の外伝。本編のネタばれを含むため、本編読了後推奨。ラオラントに戻ったロベルトは、キャシーの死の真実を知る。部分的にロベルト視点で、本編に入りきらなかった、ロベルトとキャシーの過去のエピソードも入れてみました。恋愛色強め。年齢制限は特にしませんが、大人向けです。全3話で完結済み。

一・転属（前書き）

この話は「俺を返してくれ」の外伝です。本編のネタばれありなので、本編読了後にお読みいただけるとうれしいです。

一・転属

宇宙警備隊から、ラオラント總統庁に転属になったロベルト・フアンセンは、今、總統のサーズマ・グラウジェンに連れられて、總統庁内の長い廊下を歩いていていた。サーズマのボディーガード二人がぴたりと左右に寄り添う。この二人は顔が全く同じ。おそらく人間そっくりのアンドロイド。

ロベルトは、廊下に反射する照明の光を目にしながら、見知らぬこの場所の質問は何もせず黙って付いて行つた。先程の、總統執務室での会話がよみがえる。

『突然のことで驚いただろうが、今日から宇宙警備隊の兵士をやめ、總統庁所属、ディッセンダム研究所に転属してもらいたい。急に決まったことなので、納得がいかない面もあるだろうが、今日からの仕事は君にしかできないことだ。ハーキエン人の血の入った君を使うことに關しては、反対意見もあつたが、結局、君が適任だということで落ち着いた。辞令を受けてもらいたい、ラオラントの極秘機密に關する仕事なので、これからの君の生活は大きく制限されることになる。受けるか、受けないかは君次第だが、いったん受けてからこの仕事をやめる時は、残念だが、ラオラントの秘密を守る為に、君は生涯拘束されるだろう』

背もたれのある椅子にかけているサーズマは、執務机をはさんで立っているロベルトにそう言うと、転属命令書を机の上で示した。

ロベルトは、何だろう、と心の中で首をかしげながらも、

『何でもやらせてください』

と頭を下げて、辞令を受け取った。總統直々の命令をどうして断わることができよう。

『本当にいいか？』

『はい』

サーズマは、即座に返されたロベルトの、迷いない顔を確認するようにじっと見て確かめているようだった。

『やってもらえるなら、ありがたい。給料などの待遇は今までよりもよくなる。では早速、新しい任務のことなのだが』

サーズマは、息を吸い込み、心を落ち着かせると、ロベルトの目をまっすぐに見た。

『まずは君に謝らなくてはならない。婚約していた君に伏せていて悪かった。キャシー・イベリーの真実を今、君に教えよう。今日からの任務は、彼女の複製体を監視することだ』

『えっ……』

ロベルトは、感電したかのように、自分の頬が、ひっと引き攣ったことがわかった。

キャシー・イベリー……あまりにも懐かしく、悲しい響き。忘れてたくてもどうしても忘れられない、死んだ婚約者。複製体？ キャシーの？

サーズマは顔色が変わったロベルトには構わず淡々と言葉を続ける。

『キャシーの身内は誰もいないから、彼女のことを詳しく知る唯一の者として、君を選んだ。彼女の兄、フレッド・イベリーは、実は何年も前に死んでいて——』

ロベルトは、感情の入っていない総統の説明に、息をすることも苦しくなった。めまいに襲われ、椅子に腰かけけることを許されてからも、全身を冷たい汗が吹き出し、呼吸が整わなかった。

総統の言うことの何もかもが信じられない。キャシーの複製体を作っていたこと、ドイツセンダム研究所で魂の移植実験をやっていること。死者の魂を移植した複製体のキャシーの行動が、生前と同じであるかどうか、調べて研究に協力することが任務だということ。キャシーの複製体……それがどんなものなのか、頭の中で組み立てることはできない。

総統に付いて、長い廊下を進んでいく。五年も前に死んだキャシーのことなど、今さら思い出してもなかった。キャシーは、正式な婚約までしていた自分に、何も告げることなく一人で逝った。

遺体がなかった葬儀。本人の希望で遺体は誰にも見せない、との一方的な説明で、納得はしなかったものの、頷くしかなかったあの時。義兄になるはずだったフレッドから渡された彼女の遺髪。白い布に包まれた黒髪のひと束が、残酷な真実を突き付けてきた。髪しか残さなかった彼女は、抱きしめるにはあまりにも小さかった。あれから何日も、彼女の髪を握りしめては泣き、手の中ではばけさせてはまた集める、無意味な時間を過ごした。

遺体は、死後すぐに実験用に解体され、見せられる状態ではなかったのだとの、総統の言葉が頭の中で繰り返される。

体が解体……聞いた瞬間に、顔から血液が、ザーと引いたことが自分でもわかった。倒れこそしなかったが、気分が悪くなったのを総統に悟られてしまった。自分だけの宝だった彼女の体が、研究者たちの目にさらされ、バラバラになってしまったのか。想像するだけで吐き気がする。この体調で、今、よく歩いていられるものだと、自分でも思った。

総統の足元だけを見ながら、ついて行く。どうしても顔を上げる気にならない。心の奥に押し込めてあった数々の彼女の思い出が胸に鉛を送り込み、大声で泣きたくなった。冷たそうな金属に覆われた青黒い空間がどこまでも続く。

途中、いくつも、検問所のような頑丈な扉を通った。アーチ状になった生体認識機もあちこちにある。廊下は、やがて地下への動く通路につながった。そこからはゆるい下り坂になっている。四つ目の検問所の扉をくぐると傾斜はなくなった。平らになった動く廊下はところどころ、ゆるくカーブしている。誰にも会わない。人の声のしない静けさに不安さえ覚える。地下深く、どこまで行くのだろう

う。

サーズマは、泣きそうな顔をしながら付いてくるロベルトを見て、当時、フレッド・イベリー中將が初めてキャシーを連れてきた時のことを思い出していた。

『總統、これが妹のキャシーです。よろしくお願いします』

フレッドに紹介され、キャシーは深々と頭を下げた。ラオラント軍に入隊して三年目だという。この若さで不治の病とは、酷な運命に遭遇したものだ。サーズマは思ったが、それには触れず、すぐに本題に入った。

『いくつかの注意点を確認しておこう。ディッセンダムの情報は誰にももらしてはならない。もちろん、一度入所したら、実験が成功して公にできるまでは、外との出入りは禁止だ。それは中將から聞いているか？』

『はい』

キャシーははつきりと返事し、首を縦に振った。

『それから、これも大切な事なのだが、君が実験体になることを誰にも知られてはならない。それもわかつているな？』

サーズマは、キャシーがうなずくのを確かめると、他の注意事項も説明し、最後に一番言いたくなかったことを出した。

『あと、君の婚約者、ロベルト・ファンセン君のことなのだが……彼を鉱山警備隊からはずし、外宇宙へ転属させることに決めた』

キャシーの黒い瞳が、ハッと大きくなった。

『なぜですか？ 彼には関係ありません。私は、お約束はきちんと守ります。病気になったことだって、彼に言っていないません。ディッセンダムのことは絶対にもらしません』

むきになった言い方をしたキャシーをなだめるように、横から兄のフレッドが口をはさんだ。

『彼の母親はハーキエン人だ。おまえと婚約していても、ラオラント軍に所属していても、ドイツセンダムの秘密にかかわることは、他星人の血の混じった者に教えることは好ましくない。しかも、ハーキエンは帝国の主星だぞ。ロベルトは、信用できる人物だし、帝国の要人とは無関係のようだが、どこから情報がもれるかわからない。当分はラオラントから離れてもらったほうがいいんだ』

『兄さん！ 兄さんが総統にそう提案したの？ ロベルトを私から離すようにって。兄さんはほんと私たちの結婚を応援するふりして、反対していたのね！ 酷い、酷いわ！』

目をむいて兄に詰め寄るキャシーに、フレッドは動じることなく彼女の両肩をつかんだ。

『キャシー、落ち着け。総統の前だぞ。それなら、彼におまえのことをどう説明する気だ。彼には、おまえが秘密の研究所に行ったことは教えられない。彼とおまえの休暇が合わないように調整することはできるが、いつまでもそんなことはしてられない。いずれは、おまえが仕事に出ていないことも、家にもいないこともわかってしまふ。おまえが病気だと告げてもいいが、行き先はどうやってごまかすんだ？』

『それは……あとで考えるわ』

『ごまかしなど無理だ。実験は一日では終わらない。移植が成功するまでは、彼に会うことはできないんだぞ。これはラオラントの秘密の実験だと説明しただろう。かわいそうな気もするが、彼には、まだ何も教えられない。それなら遠くへ行ってもらった方がいい』

『兄さんは……彼と別れるって言うの？』

『別れる必要などない。会わせてやることができないから、会いにくい環境を作ってやるだけだ』

『彼は何も知らずに転属させられるの？』

『その方がいい。遠く離れた彼が、もしおまえのことを忘れたなら、それだけの男だったということだ』

キャシーは、キツと兄をにらんだ。

『そんな言い方するなんて、あんまりだわ。彼はそんな男じゃない。彼が同じ星にいてくれると思うから、がんばろうって気になっていたのよ。好きで実験体になんかなるわけじゃないわ。私のことで彼を外宇宙の勤務へ飛ばすなんていや。彼を転属させないで』

怒りの中に混じる、すぎるような妹の視線も、フレッドは冷たく返した。

『もう決まったことだ』

『兄さんは仕事のことしか頭にないんだわ。本当は、彼が混血だから、私の相手としては最初から気に入らなかったんでしょ』

『違う。彼はいいやつだと知っているから、おまえとの交際を許した。きちんと挨拶に来た時だって、私は反対しなかっただろう。そんなことを今ここで言うな』

『兄さんなんか大嫌い』

涙ぐんでしまったキャシーをなだめようと、サーズマは、兄妹の会話を途中で止めた。

『ロベルト・ファンセン君には申し訳ないが、すべてがうまくいったら、彼をまたラオラントへ呼び戻して、私から話をする。彼の待遇を特別にしてもらうように、配慮しておくから、心配はいらない。彼には、数日以内に宇宙警備隊への派遣命令を出す。彼を見送ったらディッセンダムへ来てくれればいい。必ず君の複製体を完成させて、魂を移植し、君たちには幸せになってもらう。少しでも辛抱してもらいたい』

サーズマは、付いてくるロベルトを振り返った。額にうつすらと汗をにじませ、その顔色はよくない。真実を知っただけで具合が悪くなった様子だ。婚約者の突然の訃報が入った時、この男はどれほど驚いたことだろう。

——五年前。

キャシーが研究所に入所後、半年足らず。予想外に早く来た彼女の死の報告に、サーズマはうめいた。カード型の通信機の小さな画面に映るフレッド・イベリーは、覚悟はしていたかのように、サーズマからの連絡を聞き、口元を引き結んだ。

『そうですか……死にましたか。早かったですね……まだ大丈夫かと思っていました』

『中将、すまなかった。助からない運命だったのなら、婚約者に会わせてやればよかった。結果的に、ラオラントの国益を優先させ、二人を無理やり引き裂いたことになる。かわいそうなことをしてしまった。婚約者に、彼女の死を伏せることにしてもいいが……』

『それは無理だと思います。彼は……ロベルト・ファンセンは、なんとかして妹と会おうと、まとまった休みを取って帰星したいと何度も申請していました。今までは、こちらが密かに妨害してきましたが、いつまでもそんなことはできません。妹は死んだのだと、彼に、はっきり伝えます。彼に特別休暇を与え、葬儀に来てもらいましょう。もちろん、ディッセンダムの情報は漏らしませんのでご安心ください』

『そうか……しかし、彼女の体は研究所で使わせてもらう条件だった。引き渡しはできない。葬儀でも会わせてやれない』

『それはうまく説明します』

『必ず命を助けると約束して、彼女にたくさんのがまんを強いておきながら、この結果は大変心苦しい。彼女の涙を無駄にしないように、彼女の細胞を使った複製体は、大切に利用させてもらう。もし将来、魂を呼び戻すのに成功したら、きっと彼女は生き返る』

そこで少し間があった。小さな画面の中のフレッド・イベリーは指で目をこすった。

『そうなれば、どんなにすばらしいことでしょうね。いつか完全に魂までよみがえらせることができる日が来たら、妹は幸せになれるでしょうか……』

フレッド・イベリーが声を詰まらせた。

『総統、失礼しました。今、私は、つまらないことを口に出してしまいました。複製体は、死んだ人間の魂を呼び戻す為に作っているのではなく、生きている人々の為に作っているのですから、そのようなことは期待してはならないことでした。この研究が成功して、ラオラントが栄えることが私の幸せです。妹も私も軍人である以上、ラオラントに捧げた身です。妹もそれでいいと思っっているでしょう。もし、私が死ぬようなことがあったら、この体を妹と同じように、実験に利用してください』

小さな画面の向こうのフレッド・イベリーの顔が歪んでいた。このいかつい男が泣いたのを見たことは一度もないサーズマは、フレッドの深い悲しみを察し、しばらくはかける言葉が浮かばなかった。しかし、いつまでも黙ったままでは、話は終わらない。

『中将……本当に申し訳なかった』

『失礼しました。見苦しい様をお見せしました。誰よりも泣きたいのは、ロベルト・ファンセンでしょうね』

——そう、誰よりも泣きたいのは、今、私の後ろを歩いているロベルトなのだ……

サーズマは、軽くロベルトの肩をたたいた。ビクリとするロベルトの緊張をほぐそうと、サーズマは口角をあげてやさしい顔を作った。

「そう心配することはない。今回がダメでも次回に期待すればいい。生きた人間の魂の完全移植ならすでに成功している。実用化目前だ」

「はい……」

ロベルトは力なく答えた。どうも気が乗らず、仕事だと割り切れない。

「この部屋だ。一人で中へ入ってくれ。私は席をはずそう。だが、そちらが見える位置に私や研究員がいることを忘れるな」

ロベルトは、サーズマにうながされ、示された部屋へ一人で入っ

て行った。部屋の壁の上部に埋め込まれている横長の窓は、特殊ガラスになっており、向こう側から室内を観察できるようになっている。サーズマが、窓の向こうの部屋へ回り込むと、そこには、数人の研究員とともに、サーズマの息子レイと、その侍医のブラウゾンも来ていた。

「いよいよご対面か。どうなるかな」

レイが口元をゆるめながらそう言うと、サーズマは笑みで返した。「たぶん、うまく行ったと思うが、どうだろう。さあ対面だ。静かに」

部屋へ入るなり、ロベルトは低い声で愛しい女の名前をつぶやいた。そこは広くはないが、白い壁の明るい部屋だった。家具は、ベッドと、小さな金属ロッカーが一つきり。壁ぎわに置かれたベッドに、前合わせのゆつたりとしたローブをまとった、一人の女性が腰かけていた。まっすぐな黒髪を額の真ん中で分けているが、ロベルトの知っている彼女よりも髪はずっと短く、首も耳も出ている。

「キャシー」

ロベルトは感情を殺し、女性に呼びかけた。女性はゆっくりと反応し、ロベルトの方に体を向けた。

二・あふれる思い出

「僕がわかるかい？ ロベルトだよ」

女性の、フレッドに似た大きな漆黒の瞳がロベルトを映す。彼女の唇が少し開き、小さな声を出した。

「あ……」

戸口にいたロベルトは、慎重に近づいて行った。女性はベッドからゆっくりと腰を上げて、立ち上がった。彼女は、知っているはずのロベルトを見ても、笑いかけることはなく、澄んだ瞳が、ロベルトをとらえたまま何度も瞬きしているだけだった。

なつかしさの風がロベルトの心をなでる。五年が過ぎても、彼女のことを忘れることはできなかった。常に心の奥に住みつき、時に夢に現れて、自分の泣き声で目が覚めた。彼女が死んでから、数えきれないほどたくさん、眠れない夜を過ごした。あの言いようもない悲しみと、今会えた喜びが混じり合い、作り笑いでごまかして高ぶる感情を必死で沈めた。

「キャシー、久しぶりだね。会えてうれしいよ」

これが彼女の細胞を継いだ複製体。あまりにもよく出来ている。大きな漆黒の瞳も、形のいい鼻も、小さな口の口も、黒々とした髪の色まで同じ。

キャシーの複製体に別人の魂が宿ってしまい、何体もの『キャシー』が廃棄されたと聞いた。人の細胞から、魂の器を作り、死んでしまったはずの人間の魂を呼び戻す、そんなことが本当にできるのだろうか。実はキャシーは死んでおらず、これは複製体ではなく、本人ではないのかと考えてくる。

「キャシー……僕だよ」

キャシーは、ロベルトの顔を見ながら、何か言おうとしているようだったが、唇を動かすだけで、笑顔は見せない。

ロベルトは失望を隠し、問いかけた。

「僕たちが最初に会った場所を憶えているかい？」

彼女はベッドの前に立ったまま、何か言ったが、声が小さすぎて聞こえなかった。

「何？ もう一度言ってくれないか」

キャシーは唇を動かそうとするが、またきちんと言葉にならない。ロベルトは、出かかったため息をぐくりと飲み込んだ。

三年程前に、ハーケンへの宇宙船の中で偶然会ったキャシーの兄、フレッド・イベリーの様子を思い出す。あれは記憶喪失でもなんでもなく、中身は別人だったのだと、今日、初めて知らされた。見た目はそっくりでも、魂が異なれば、あんなに違うものなのだ。何も期待するべきではない。このキャシーの複製体にいろいろ質問して、データがとれればそれでいい。

「憶えていないならいいんだ。それなら、僕の名前を、君がいつも呼んでくれた呼び方で言ってほしい」

見つめ合っている二人の距離は近い。

手を伸ばせばそこに彼女が。腕を開いたら彼女を抱きしめてしまう。涙を出そうとする感情のうねりを、ぐつ、と飲み込む。

「君はキャシー・イベリーじゃないのか？」

隣の部屋では、窓に張り付いてレイたちが覗く。

「おや、様子がおかしいぞ。名前が出てこない。また失敗か。他人の魂が入ってしまったらしいね。今度こそ完ぺきだと思ったのに。ねえ、ブラウゾン、やっぱりさあ、脳のしわまで正確に再現しないと記憶がよみがえらないかもしれないよ。魂が所持する記憶と、肉体が所持する記憶と両方がそろわないとダメみたいだ。これでは死者の魂を呼び出す意味がない」

「レイ様、失敗と決めるのは早すぎますぞ。もう少し様子を見ましょう。混乱しているようですな。興奮して言語障害に陥っている状態です。心拍数がかなりあがっております」

レイたちのいる部屋にはいくつかのモニターが置いてあり、今のキャシーの状態がそこにどんどん記録されている。ブラウゾンは、手元にあるモニターに目をやったが、すぐに二人の方へ視線を戻した。他の研究員たちも息をつめて成り行きを見守る。

キャシーは、ロベルトの顔をじっと見ている。

「わたし……し……」

ようやく、聞きとれる言葉が、キャシーの唇を抜けた。ロベルトは無意識に眉根を寄せていた。

——君じゃないのか？

ロベルトの心に打ち寄せる感情の波。何も考えずに、彼女のすべてに触れ、何もかもを確かめたかった。彼女のキスの仕方、自分を抱きしめてくれる手の位置も、すべてが同じかどうか、今すぐ知りたかった。鼓動が高まり、指先が彼女を求め、腕が伸びそうになる。理性の警鐘が頭の中で響き渡る。これは任務。激情に溺れるわけにはいかない。

ロベルトは涙でばやけてきた彼女の顔を見ながら、同じ質問を繰り返した。

「キャシー、僕の名を……二人だけで呼ぶ時の名で呼んでくれないか」

キャシーは、喉の奥で声を出したが、今度もはっきりとした言葉ではなかった。ロベルトは辛抱強く話しかけた。

「君は、キャシー・イベリーだよな？ そうだろう？ 頼む、君の魂が君であることを証明してくれ。僕は……っ……」

とうとうこぼれてしまった涙。隣の部屋から見られていることがわかっていても、止められない。

「僕は君が忘れられなくて誰とも結婚していない。僕にとっては君

だけがすべてだった。君がいつも、僕をどう呼んでいたか思い出してくれないか？」

キャシーは、唇だけを動かした。

「何？ 聞こえないよ」

キャシーは、すつと両手を伸ばすと、ロベルトの顔を流れる涙に、まず指先で触れ、そして、手のひらで、涙の流れる頬をすつぽりと包んだ。キャシーの手から、ロベルトの頬にじか伝わる体温。ロベルトは嗚咽で震える声になった。

「キャシー……っ……」

これは命ある肉体。キャシーの魂を宿していないかもしれないけども、キャシーはこうして生きている。指をからめ合ったこともあった、やわらかい手。頬に触れてくれているこの手の感触に、甘く苦しい思い出が渦を巻く。

遠くなったあの日。

『ロベルト、妹のキャシーだ。入隊したばかりで何もわからないから、いろいろ教えてやってくれ。配属は、地上パトロール隊。我々、鉱山警備隊とは頻繁に顔を合わすことになるだろう』

軍で年に一度開催される、家族謝恩会の時に、当時上官だった、フレッド・イベリー中將が連れてきた若い女性。

『はじめまして。早く仕事に慣れる努力をします。よろしく願います』

キャシーはそう言っ、ロベルトに手を差し出し、握手を求めた。彼女の、フレッドに似た大きな黒い瞳は、ロベルトの心に強く残った。

その後は、隊同士で会えば、挨拶する程度だったが、次の年の家族謝恩会で会った時に、フレッド抜きで、二人でゆっくり話す暇があり、初めて二人きりで会う約束を交わした。それから恋に落ちるまでに時間はかからなかった。

デートを重ねたある日、キャシーの家で、彼女が入れてくれた、甘い香りのするお茶を前に、ロベルトは、キャシーの唇から目をそらし、勇気を出して切り出した。

『ねえ、キャシー、今日はまじめな話があるんだ。落ち着いて聞いてほしい。君が僕に好意を示してくれるのは、すごくうれしいんだ。僕も君が好きだ。だけど、僕は』

何気なく返されたキャシーの無垢な笑顔に、言つのをためらう。前から言わなければならないと思っていたことだ。

『知っているだろうけど、僕にはハーキエン人の血が入っていて、ラオラントの軍人としての出世は望めない。将来を考えると、こうして君と楽しい時間を過ごしていて、本当にいいのだろうかと不安になるんだ』

キャシーの黒い瞳が揺れた。

『軍人としての将来がないってこと？ そんなことはないでしょうけど、そう思うなら、どうしてわざわざラオラントの軍人になったの？ 確か、ハーキエンにお母様がいらっしやるんだったわよね？』

『ああ、そうだよ。なかなか会えない母のことは気になるけど、僕がラオラント軍に入ったのは母の勧めでもある。僕は、父に似て、見た目はラオラント人だから、ハーキエンへ戻ったら異星人扱いさ。向こうで暮らしてもいいことは何もない。生涯、ラオラント軍の無階級兵をやっているけど、ハーキエンで働くより待遇はうんといいいんだ』

『そうなの？ 混血だと大変ね。でも、生まれに関係なく、ラオラントの軍人として、ちゃんと仕事はしているじゃない。真面目にがんばれば、昇進はできると思うわ』

ロベルトは、少し黙りこみ、キャシーが入れてくれた飲み物に口をつけながら、考えごとをしていたが、飲み物を置くと、立ち上がった。

『ロル？ もう帰るの？ ゆっくりしていつて』

『まだ帰らないけど、少しの間だけ、後ろを向いていて』

ロベルトは、上半身の服を素早く脱ぎ捨てた。

『キャシー、僕の背中を見てごらん』

キャシーが振り返ると、ロベルトは上半身裸にした背中を見せていた。驚いて声が出なかったキャシーにロベルトは、背中を向けたままで、首をまわし、肩越しに悲しそうに目を細めて笑った。

『気持ち悪いだろう？ 見た目はラオラント人でも、僕は、やっぱり半分はハーキエン人だ』

見たことがなかったロベルトの肌に、思わず顔を赤らめたキャシーだったが、そのたくましい背中に浮かぶ、複数の不規則な白斑に、目が釘付けになった。

白く丸い模様は、もともと色が白いラオラント人の肌よりもさらに白く、水で溶いた白い粉をこぼしたように、ロベルトの背中のおちこちにある。ハーキエン人には首筋まで白斑がある者がいることは、キャシーも知っていたが、実際に近くでしっかりと見たのは初めてだった。

『わかったかい？ 僕は、こんな体の異星人なのさ。母の星の為に、いつラオラントを裏切るとも知れず、信用できないと思われているから、生涯役職のない一兵士で終わる。すぐに階級は君の方が上になるだろうね。君のことがどんなに好きでも、僕と君とは釣り合わない』

『ロル……』

キャシーは眉尻を下げて、泣きそうな顔になった。

『こんな男で残念だろう？ でもこれはどうしても君に知ってもらいたかった。これが僕の現実だから』

ロベルトは脱ぎ捨てた服を拾おうと腰をまげて手を伸ばした。

『うわっ！』

かがんだ背中をいきなり後ろから押され、ロベルトは服を手にしたまま前へころんだ。そのままキャシーは乱暴に、ロベルトをおむけにして組み敷き、上に乗ったまま早口でロベルトに怒りを向けた。

『なによ、だからなんなの。階級とか、釣り合いとかって、そういうことが、そんなに大切なの？ 異星人だから、私はいらなんて言わないの？ 今日、元気がないと思っただけ、私と別れる為にここまで付いて来たのね』

下になつてゐるロベルトの顔に、キャシーの涙が落ちてきた。

『キャシー！』

彼女の漆黒の双眸にはどんどん涙がわき、玉になつてポタポタとロベルトの顔に落下していく。

『君がいらなんて……違うんだ。君が欲しい。今すぐにでも。君が僕をさそつてくれて、うれしくてたまらないんだ。だけど、僕が混血なのは何年経つても変わらない。今はラオラントの為に精一杯働くけど、もし、ラオラントとハーキエンが戦争にでもなつたら僕はどうしていいかわからなくなると思う。ラオラントの軍人としては失格だよ。ラオラント人はハーキエンのことを良くは思っていないことも知っているし。いつか、ラオラントとハーキエンは戦争になる気がする。だから、君に申し訳なくて……』

キャシーはそのまま、低い声で泣きだしてしまつた。

『悪かつたよ、泣かせるつもりはなかつた。君は素晴らしい人だから、もつと君にふさわしい相手を選ぶ方が——』

キャシーは、ロベルトの体の上にまたがるように乗つたまま、彼の頬を、パチンと両手ではさんだ。

『いやよ、私は別れるつもりなんかないわ。こんなどうしようもないことを言われて、どんなに私が悲しいか。ロルは、私の気持なんか、全然わかっていない』

『っ！』

彼女の方から、押し付けられたキス。キャシーは、ロベルトの頬から手を離すと、双肩をなでるように手を滑らせ、素肌の胸に頬を摺り寄せた。

『……いやよ、別れ話なんか聞きたくない』

『だめなんだ。これ以上、君と深く付き合つたら、僕は……っ』

キャシーは顔を上げると、ロベルトのこげ茶色の髪に指を通し、再び唇を重ねた。体のぬくもりがお互いに伝わる。どちらも息が止まるほどに、心も体も熱を帯びていく。

『キャシー……』

『ロル……いや……逃げないで』

キャシーはキスを終えても、ロベルトにしがみついていた、どこうとしない。ロベルトは、手持ち無沙汰だった両手で、キャシーの背中をそつとさすってやった。

すすり泣くキャシーがようやく落ち着いた頃、テーブルに置かれた飲み物はまだ残っていたが、すっかり冷め、湯気が全く出なくなっていた。静かな二人きりの部屋で、ロベルトは言葉を選んで話しかけた。

『キャシー、よく考えてくれ。このまま僕と付き合えば、後悔することになる。僕は、遊びで君と付き合うことなんかできない。こんなに女性を好きになったことは初めてだ。これが一時のたわむれにしかすぎないなら、傷が深くなる前に、いつそのこと君と別れて――』

キャシーは手を伸ばしてロベルトの口に手のひらを当てた。

『いや。いやよ。こんなの。いやな話は二度としないで。言っておくけど、私は誰とでもこんなことをするような女じゃないのよ』

ロベルトの、胸に流れたキャシーの黒髪。普段、軍にいる時は、後ろでまとめているが、今は、結ばず肩に広がっている。つややかで、こしのある、きれいな髪。甘えるように押しつけられているやわらかな頬。目を閉じてても開いても、脳内が刺激される。ロベルトは腕に力を込めると、抱き締めたままで、ごろりと転がり、今度はロベルトの方がひじをついて見下ろす形になった。

『……僕でいいのかい？ 僕は、なんもとリエのない半異星人だけど、君を思う気持ちなら、誰にも負けはしない。君の幸せを願って、別れることを考えたけど、君がこんな僕でも望んでくれるなら、どこまでも君と一緒に行きたい。君を愛している。愛しすぎて狂いそ

うになっている』

ロベルトは片手で体を支えながら、キャシーの髪をひとにぎりして、髪に口づけした。キャシーは、涙の乾き切らない目を閉じて、ロベルトを引き寄せるとささやいた。

『ロル……大好き。私はどんなあなたでもかまわないの。別れるなんて、もう言わないで。お願いだから』

『……わかった。ありがとう、キャシー。つまらない話をして悪かった』

唇を重ねると、キャシーの細い指が、ロベルトの背中の白斑の上を滑った。あたたかい手だった。

あの時と同じ手が今、ロベルトの頬の上にある。指の長さまでは憶えていないが、本物のキャシーは、ロベルトの頬をこんなふうに両手で挟むことが好きだった。こうして頬に手を当てて、見あげる『キャシー』の複製体は、本人と何の違いもないように感じる。

「キャシーだろう？ 君は」

ロベルトの涙は、キャシーの手をさらに濡らした。

「体は彼女のしぐさを継いでいるのか……」

三・（最終話）想い

ロベルトの頬の上にあるキャシーの手の触れ方。右手は耳のあたりまで指を伸ばして、頬をなでるように、左手は、手のひらの丘で包むように。

「同じだ……」

ロベルトは、うめくようにつぶやいた。目の前にいる女が、愛していたキャシーではないと、どうして信じられるだろう。いや、これはキャシー。自制心が揺れ、彼女の髪に右手が伸びていた。

「君の髪だ。これは本物じゃないのか？」

しつとりとした黒髪は、硬すぎず、つるりとした手触りで、適度に腰がある。何度も握りしめては泣いた、彼女の遺髪と同じ感触だった。ただ、今は短く、指先からすりぬける長さしかない。

キャシーは髪に触れられても、ロベルトの頬から手を離さない。じつと彼の目を見たまま、唇をかすかに動かしている。

「何？ はつきり言わないと、君かどうかわからないじゃないか」

聞き取れないもどかしさに、気がつけばロベルトの方も、彼女の頬を両手ではさんでいた。こうして共に頬に触れながら見つめ合うことが、過去に何度あったことだろう。とめどない涙とともに、むせかえる思い出たち。

彼女に最後に会ったのは、ロベルトが転属先へ発った時。宇宙港まで見送りに来てくれたあの時も、キャシーは泣いてロベルトの顔を両手ではさんだ。

『ロル……絶対に私を忘れないでね』

『僕が君を忘れるって？ 酷いなあ、信用してくれよ。遠くへ行っ

たつて、僕は浮気なんかしない。毎日通信連絡を入れるから、そんなに泣くこともないだろう？ 急な転属で結婚が伸びたのは残念だけど、早ければ一年で戻るかもしれない。待っていてくれるね？
ラオラントに戻れたら、すぐに結婚しよう』

キャシーはうなずいた拍子に、ためていた涙をこぼした。

『私……私ね……』

『どうした？ 仕事に慣れたら、まとまった休暇をもらって、君に会いに戻ってくる。そんなに悲しそうな顔をしないでくれ』

『私、がんばるから。どんなにつらくても負けないから』

『そんなに仕事をがんばる必要なんかないよ。大変すぎるならやめたっていいじゃないか』

『仕事のことじゃなくて、その……』

キャシーは、眉を寄せた涙の目でロベルトを見あげる。黒いまつげが涙を含み、いつもより長く見えた。

『私たち、きつとまた会えるわよね？』

キャシーは、ロベルトの頬から手を離すと、胸に顔をうずめた。

『当たり前だ。さびしいかい？ 僕だって、さびしくないと言ったらうそになるけど、これは命令だから従うしかない。宇宙警備隊は、鉱山警備隊よりも危険が少ないらしいから、よかったと思っておくじゃあ、そろそろ行くよ。時間だ』

『……ロル……もう少しだけいて……お願いよ、出航の合図が鳴るまでここにいて』

『僕もそうしたいけど、ぎりぎりだと荷物を預ける暇がないから、早めに行かないと』

互いの首に手を回し、髪に指をからませ、魂まで注ぎこむような情熱的な口づけを交わした。唇を離して、見つめ合う。

『キャシー、元気で』

『待つて、ロル……ロルツ！ わあああ……』

いったん持ち上げられたロベルトの荷物が、ゴトリと音をたてて宇宙港の床へ落ちた。急にキャシーに飛びつかれて、よろめき、数

歩下がったロベルトは思わず苦笑いしていた。

『キャシー！』

『……行かないで……』

絞り出すような声だった。

『困った甘えん坊なんだ』

なだめるように彼女の背中をポンポンと軽くたたいた。

『僕がさっさと行かないと、君の涙が止まらないじゃないか。笑ってくれ、キャシー。いつものように。笑顔で送ってくれないのか？ 外宇宙へ行かされることなんか、たいしたことじゃない。きつと、すぐに戻る』

『ああ……ロル……ごめんなさい……私ね……本当にごめんなさい』

キャシーは大声で泣いて、胸に顔をこすりつけてきた。支給されたばかりの、真新しい宇宙警備隊の制服にいくつものしみができた。『何を謝っているんだ。夜勤の日以外は、毎日連絡するよ。画面越しになるけど、会えるじゃないか』

『まだ行かないで……あと少ししかないの……っ……』

『今夜も連絡するよ。外宇宙から見たラオラントの映像を、君に送るから、楽しみにしていて』

キャシーをやさしくひきはがすと、背中を向けて歩き出した。

『ロルー！』

泣いて別れを惜しむ彼女を切り離して出発したあの日。彼女の悲鳴にも似た呼び声が、背中に突き刺さったが、笑顔で手を振り返した。宇宙船の入口から振り返って見た彼女の姿。両手で顔を覆い、その場にしゃがみこんで泣いていた。あれが、生きている彼女を見た最後だった。

後にこの場面を何度も思い出し、さらに月日が流れても、繰り返す夢に出て来て、時に仕事中でも、涙を止めることができなくなっ

た。

もう少しだけいてほしいとせがまれたのに、どうしてささやかな望みを蹴ってしまったのか。あの時には、不治の病のことは判明していたはずなのに、なぜ、察してやれなかったのか。自分がいつまでもぐずぐずしていると、キャシーが泣き止まないだろうと思ったことは間違っていた。

押し寄せる後悔だらけの思い出に唇をかむ。

すべてを知らされた今、ようやくわかった。彼女は、実験が成功しない限り会うことはない、二人で生きる未来はないかもしれないと、告げることができずに泣いていたのだ。治るみこみのない病……その体を実験に差し出すことで、生き延びられるかもしれないわずかな可能性にすべてをかけて。

実験が成功しない限り――

ロベルトは残念さを顔に出さないように、無理やり笑おうとしたが、笑うことなどできなかった。笑いの代わりに、涙を突き上げる、なさけないうなり声が出ただけだった。

今、ここにいる女性は、凝視しているだけで微笑んではくれない。どうやらキャシーではないようだ。実験は成功しておらず、彼女はどこにもいない。彼女の細胞を継ぎ、姿も、しぐさも同じでも。死者の魂を呼び戻すなどと、都合のいいことができるはずはなかった。

「キャシー」

昔と同じ形の指が、同じやわらかな手のひらが、今、ロベルトの頬を温めている。頬のはさみ方は、当時の彼女と何も変わらなかった。

「中身は別人なんだね……こんなに同じなのに。顔も姿も、全部キャシーじゃないか。これは君の手だ。君そのものの……本物の君は、やっぱり逝ってしまったんだね。あれで僕たちは最後になっ

たなんて——」

ロベルトの、果てしなく湧き出す涙は、形を崩し、キャシーの指の間を抜けて落ちていく。キャシーの瞳は、まっすぐにロベルトへ向けられていたが、名前を呼んではくれない。言葉を出そうとしているような気もするが、泣いているロベルトに同情しているようにも思える。

ロベルトは今まで心に貯めていた言葉をどんどん出した。

「僕がわからないか。そうか……それでもいい。君の一部を継いだ体が僕の涙をぬぐってくれるなら、それだけでも幸せだ。キャシー、僕がどんなに君に会いたかったかわかるかい？ 君の後を追って死のうと何度も思った。君をうらみもしたさ。どうしてすべてを話してくれなかったのかって。でもさっき総統から事情を聞いて、僕はやっと全部知ったんだ。君がどんなに苦しんでいたかもわかった。僕にすべてを打ち明けたくて、君が何度も泣いていたことも聞いたよ。つらかっただろう？ 僕は君が病気だったのに、気がつきもせず……最後の通信で会話を交わした頃には、君が起き上がることもできないほど弱っていたとも知らず、僕は偽りの映像を、画面の中で微笑む君が真実の姿だと信じていた」

在りし日のキャシーと、目の前のキャシーの姿がだぶり、ロベルトの声がかすれた。

嗚咽を止めようとする喉が狭まり呼吸がまともにできない。もつと言葉を無理やり出そうとしたが、準備された問いかけは、喉の奥につかえる。必死で自分に言い聞かせる。これは実験で、別室から監視されている。こんな話ではなく、もっと二人だけしか知らない情報について話をしなければならないとわかっているが——

「えっ？」

布の擦れる音とともに、体を包まれた。突然のことに、一瞬、戸惑う。しかし、すぐに状況を理解し、体が反応した。

キャシーの細い両腕がロベルトの背中に周っていた。指先まで強

く力をこめてロベルトの体を抱き寄せている。

「ロ……ル……」

かすれた小さな声が胸を通り抜けた。ロベルトは、ハツとして、彼女の両肩をつかんで体を離し、正面から顔を覗き込んだ。

「君なのか？」

ロベルトを見上げるキャシーの黒い大きな瞳から涙が湧き出していた。

「……ごめ……なさい……」

「キャシーか？」

消えかけた希望の灯が、再び元気を取り戻そうとするが、ロベルトは慎重だった。期待して、もし、彼女本人ではなかったら……舞い上がるうとする光を抑え込む。キャシーの瞳の奥まで確かめるように、少し顔を近づけた。

「もう一度、はつきりと言ってくれ」

「……ロ……ル……」

ロベルトは、あふれ続ける涙とともに、空気をごくりと飲み込んだ。

「ああつ……君だ」

早まる心臓。これ以上ないほどに、打ち鳴らされ、悲しみがほどこれていく。長く胸に秘めてきた苦しい塊がバラバラと砕けていく。「そうだよ、君はいつもそう呼んでくれていたんだ」

キャシーは、使い慣れない言語を話しているような調子だったが、もうそんなことはどうでもよかった。

「君はキャシーだ。間違いないね？」

彼女は首をコクンと縦に下ろした。ロベルトは、キャシーの体が折れんばかりに、腕に力を込めて抱きしめた。こらえきれない思い。キャシーが胸の中で肩を震わせている。

「キャシー、悪かった、僕が悪かった……何も気がつかず……」

ロベルトがキャシーの耳元に唇を押し当てて、謝罪の言葉を繰り返すと、キャシーは、小さく首を横に何度も振った。

隣の部屋では拍手が起こった。総統のサーズマは、隣に立っていたレイと顔を見合わせた。

「レイ、やったぞ、成功だ。今までの実験では、どのキャシーも、彼の愛称を言うどころか、自分の名前すら言えた者はなかった。今回は彼女の反応がにぶくて心配したが、どうやら本人の魂がうまく宿ってくれたようだな」

「総統、おめでとうございます。興奮でうまく言葉が出ないようですが、これならば、ほぼ成功したと言えます。後は日常生活が普通にできるかどうかを試すだけです。それが確認できれば、生きた体に宿っている魂を移植する方法と、死者の魂を呼び戻して移植に使う方法、両方が確立できることになります。ラオラントはほとんど人口が増えますぞ」

ブラウゾンも顔中しわくちやになりながら、歯を見せて笑った。レイはブラウゾンに近づくと、ひそひそと耳打ちした。

「ねえ、ブラウゾン、この実験が成功したならさ、死んでも生き返るわけだから、父さんはずっと総統をやるんだろう？ それなら、俺は総統にならずに済んで、永遠にこの研究所で好き勝手にやらせてもらえるわけだ」

「それはなりませんぞ。そんなことを総統がお許しになるわけがありません」

「父さんがいるのに、どうして俺が総統にならなきゃいけないんだ」「こら、レイ！ 何を言っている」

サーズマがレイたちの会話に気がつき、わざと怖い顔をして見せた。レイはにやにやとブラウゾンを見て、笑い声を混じらせながら言った。

「何って……今さ、ブラウゾンがね、実験が成功したから、引退したいって。体を取りかえて若くなって、お嫁さんが欲しいってさ」「レイさま！ 何を――」

しわだらけのまぶたを、ショボショボと動かしたブラウゾンに、

研究員たちも大笑いした。防音が施された窓の向こうには、こちらからの声は聞こえていない。レイたちは、覗き窓から離れた。ずっと見つめているのは、さすがに悪い気がしたのだ。

「ねえ、ブラウゾン。あの二人、当分はここで暮らすんだらう？複製体から子供ができるかどうか、それも興味深いね」

「それも楽しみですが、そんなことよりも、今、キャシーに鎮静剤を打ったほうがよさそうですね。まともに話せておりませんゆえ」

ブラウゾンは、総統に投薬の同意を求めたが、サーズマは反対した。

「もう少し待て。二人の気持ちはきちんと通じ合っている。今、踏み込んで邪魔をするのは酷だらう。何はともあれ、これが無駄にならなくてよかったな」

サーズマは、この部屋に用意されていた、金色に光る髪飾りを指差した。それは、祝福の言葉たちが細かくびっしりと刻まれた金布を編み込んだ手作りの輪で、ラオラントでは、花嫁になる者が、結婚式の時に頭に乗せるもの。

「後で持つて行ってやろう。我々は、祝賀会の用意をしようか」

窓の向こうの、ロベルトとキャシーは、固く抱き合っていた。

「キャシー……キャシー……」

「ロ……ル……会いた……かった……」

片言で伝えられた想い。二人はすべてを忘れて、確かめ合うように、熱い唇を触れ合わせた。

(了)

三・（最終話）想い（後書き）

ここまでお付き合いいただき、感謝でいっぱいです。
読んでくださった方々に、心よりお礼を申し上げます。
ありがとうございました。

二〇〇九年 四月 菜宮雪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5631g/>

あの日と同じ手のぬくもり【「俺を返してくれ」の外伝】

2010年11月12日11時40分発行